ボートレース徳山で行われた「GⅠ徳山クラウン争奪戦開設62周年記念競走」で優勝した谷村選手（左）とその優勝カップを持つ中尾市長（2016年2月5日下関市役所）

市民と市長を結ぶコラム

元気UPアップ通信

下関市長の部屋 検索 http://www.city.shimonoseki.lg.jp/

今「ボートレース下関」が元気です

こんにちは。市長の中尾友昭です。昨年12月、近年の本市のボートレース事業への取り組みが高く評価されてBOATRACE（ボートレース）振興会から表彰されました。また、先日ボートレース徳山で開催されたGⅠレースで下関市出身のボートレーサー・谷村一哉選手（下関商業高校卒）がGⅠ初優勝を飾り、その報告に来庁されました。下関市出身ボートレーサーのGⅠ優勝は、18年ぶりの快挙です。ありがたいことに谷村選手から福祉のためにと寄付までいただきました。

皆さんは「ボートレース」にどのようなイメージを持っていますか。公営競技の一つで、「ボートレース下関」は昭和29年10月の初開催から62年の歴史を持ち、今では本市の重要なレジャー施設の一つとして位置付けています。

収益金は、これまで市内の小・中学校や公民館など多くの施設の建設に役立てられ、最近では、学校の給食用備品の購入や空調設備の設置など教育環境の整備に使われました。実は、東日本大震災からの復興支援やハンセン病の制圧活動、海外での農業支援など社会貢献活動にも役立てられています。

本格的な人口減少社会を迎える中、本市も例外ではなく、市税の減少と社会保障関連経費の増加という厳しい財政状況が予想されます。収益事業であるボートレース事業を本市の有力な財源確保の手段とするため、経営改革を行いました。平成23年度の山口市阿知須への「ミニボートピア山口あじす」、平成24年度には「ふく～る下関」を設置し、平成26年度には「オラレ下関」をオープンさせるとともに機構改革も行い独立した公営企業として再スタートさせました。平成27年度には「競艇」から、組織、事業と施設の名称すべてを「ボートレース」に改め、イメージアップを図りました。

今年、ボートレース下関は、全国で6番目（中国地方初）のナイターレース場として生まれ変わります。

平成29年度から通年ナイターレースを開催し、ボートレースに縁が無かった方にも楽しめるレジャー施設にするとともに、全国規模の広域発売を展開させ、本市財政に大きく寄与する施設になるよう大いに期待しています。

これからのボートレース下関にぜひ注目してください。

しものせきナビ vol.65

幕末維新紀行

肥中（ひぢゅう）台場跡

下関市豊北町大字神田

肥中台場跡は、幕末の長州藩の沿岸防備体制を今に伝える遺跡として、昭和60（1985）年に豊北町指定史跡となり、現在は市指定史跡です。前回のこのコーナーで紹介した涌田（わいた）青井（あおい）の台場（砲台）などと同様に、日本近海に出没した外国船への危機感から、長州藩が設置しました。

台場は、肥中湾を取り巻く古城山の岬先端に位置し、背後に砲台を据えるための石垣が、幅約500メートルの湾口を虎視します。

肥中の地は、文明3（1471）年に、申叔舟（シンスクチュ）が著した『海東諸国紀（ヘドンチェグキ）』に「賓重関（ひじゅうせき）」として登場します。大内氏の朝鮮交易の一翼を担い、海上関が設けられていました。

大内氏が山口と結ぶ肥中街道を整備したのも、この地を重要視したからにほかなりません。以降、肥中は北浦の海上交通・交易の要として発展することとなり、幕末期の台場設置もこの地の歴史的・地理的背景を投影したものといえます。

嘉永2（1849）年、萩藩主毛利敬親の命で、吉田松陰らは北浦沿岸の防備体制の巡視（じゅんし）を行います。彼が残した『廻浦紀略（かいほきりゃく）』には、肥中の古城山（肥中台場跡）と矢倉山の台場を視察したことが記されており、本市における松陰ゆかりの地にもなっています。